

自己評価報告書(最終報告)

報告者

人間形成コース／梶井 一暁

■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 教員養成大学教員としての授業実践

中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申したが（平成24年8月28日）、その中で「教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」と提言している。この答申の考え方を実現するため、教員養成大学に籍を置く教員として、将来、教師を目指す学生に対してどのような授業実践を展開すればよいか。あなたの取り組みを、①授業内容、②授業方法、③成績評価の三つの観点から示してほしい。

1. 目標・計画

- ①歴史研究を基盤とした教育学の可能性を探り、それをふまえ、教育現実を過去・将来とのつながりという継続的視点をもって考察できる内容を構築・提供する。
- ②地域に伝存する一次資料を積極利用・提示し、資料の批判と保存のありかたを具体的に考察できる方法を取り入れ、教師としての教材研究能力の育成を図る。
- ③授業理解の実質を豊かにするため、学習課題としてプレゼンテーションを課し、その成果を評価に反映させる。

2. 点検・評価

- ①教育実践者の基盤としての教育学(教育史)を重視し、教室スキルの習得を好む傾向のある学生に対して、教育的営為の体系的な理解と思考のため、歴史的視点が必要であることを授業や論文指導で教授した。
- ②市内小学校(里浦小学校・黒崎小学校等)に所蔵される明治期や戦前期の史料を調査することを通じ、学生が将来、教師となり、勤務する学校や地域にも教育の歴史や価値があることを積極的に意識し、その保存・調査者となる資質形成を図った。学校の統廃合や休校が進み、史料の散逸が懸念されるため、必要な作業であると考えたからである。
- ③大学院「人間形成文化史研究」「近代教育文化史演習」において、学生の主体的で批判的な学びを促すため、学生が自身で関連テーマをみつけ、それを解釈・検討し、プレゼンテーションを行う学習課題を取り入れ、その取組過程を学期末評価に反映させることにより、学生の持続的・発展的な授業への参加・関心を図った。

Ⅱ. 分野別

Ⅱ－1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

- ①前年度に引き続き、学生の理解度と関心の所在を把握して授業を進めることに努め、授業に対する意見や質問を記すカードを作成する。カードは授業改善のための資料として役立てる。
- ②地域文化(とくに四国遍路)を活かした授業実践を試み、学生への特色的な授業の開発・実施に取り組む。
- ③学生の進路相談に積極的に応じ、とくに教員採用試験対策の指導(面接・論作など)を行う。

2. 点検・評価

- ①大学院「人間形成文化史研究」、学部「学校と人間形成」で授業カードを活用し、受講生の理解度や関心を把握しながら授業を進行した。
- ②学生の四国遍路体験を取り入れた授業を学部「阿波学」と大学院「四国遍路と地域文化」で実施し、担当教員として授業を企画・運営するとともに、遍路引率を行った。この実践は社会的な関心も高く、徳島新聞と読売新聞の取材を受けた。また、大学院「教育実践フィールド研究」でも遍路文化の教材化を試み、授業指導案を作成した。
- ③教員採用試験対策の面接・論作指導について、京都府、兵庫県、東京都等を受験する学生に対して行い、合格者が出た。

Ⅱ－2. 研究

1. 目標・計画

- ①教育史と宗教史を架橋する人間形成文化史の研究を構築し、研究成果を発表する。
- ②科学研究費補助金・基盤研究C「地域の教育・文化拠点としての近世寺院」の代表者として、寺院所蔵史料の調査研究に取り組み、寺院の教育史的意義を考察する。
- ③海外の教育学研究の成果を検討し、優れた著作の翻訳作業を本格化する。

2. 点検・評価

- ①人間形成文化史研究の観点から教育史を叙述する学術書の出版に向けて執筆準備している。今年度の刊行は難しいが、2014年度の刊行をめざしている。
- ②科学研究費補助金・基盤研究C「地域の教育・文化拠点としての近世寺院」の助成を得て、寺院所蔵史料や地方文書館所蔵史料の調査を進めた。
- ③イギリスの教育史家ロイ・ロウ氏の著作を共訳し、『進歩主義教育の終焉』(知泉書館、2013)として刊行した。また、その書評会(於放送大学広島学習センター)を開き、成果を点検した。

Ⅱ－3. 大学運営

1. 目標・計画

- ①地域連携委員や大学機関別認証評価WG委員などとして、大学運営に貢献する。
- ②専修免許状の実質化に関するプロジェクトの推進に尽力する。

2. 点検・評価

- ①地域連携委員として委員会運営に参加した。また、大学機関別認証評価委員（WG主査）として報告書を作成・提出するとともに、訪問調査面談に対応した。
- ②修士課程教員養成カリキュラム研究開発委員としてWG主査と研究会発表者を担当し、プロジェクトの推進に努めた。シンポジウムで報告するとともに、イギリスのバーミンガム大学で教員養成の高度化に関する調査を実施し、報告書を作成した。

Ⅱ－4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

1. 目標・計画

- ①地元の学校教員と連携し、地域の文化や伝統による人間形成作用に関する共同研究を進める。
- ②報道機関の教育文化事業に協力し、新聞の教育欄への記事提供を行う。
- ③外国人留学生の研究指導希望があれば、積極的に受け入れる。

2. 点検・評価

- ①四国遍路を活かした実践研究を中学校教員と連携して進めた。また、県教育委員会教員と教員養成の高度化に関する考察を進めた。
- ②岐阜新聞社に6本の教育記事の提供を行い、「中学生の広場」に掲載された。なお、これまでの執筆記事をもとにした単行本化企画が進んでいる。
- ③教員研修留学生1名について、近森教授と連携して支援を行った。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

- ①学術面では、近年取り組んできたイギリスの教育史家ロイ・ロウ氏の著作の共訳本『進歩主義教育の終焉』(知泉書館、2013)を刊行することができた。その書評会を国内で開くとともに、当邦訳本をイギリスのバーミンガム大学に寄贈し、成果の内外への発信に努めた。
- ②大学運営面では、大学機関別認証評価にかかわる評価書作成と訪問調査面談対応を行うとともに、修士課程教員養成カリキュラム研究開発委員会にかかわるプロジェクト推進に努めた。